

幕末期幕府権力をどう見るか——「幕閣」という謎——

朴

薫

我々は変革期研究の際に、よく変革主導勢力に注目しがちである。彼らが「開明的」（近世から近代への移行期には「近代的」）で有能な勢力だとあらかじめ想定した上で、体制側の勢力は守旧的、かつ無能な勢力と、暗々裏に前提する傾向がある。よって歴史研究者は前者を政治的に正しいものとみなし、強い研究動機と興味に引かれる。もっとも歴史の勝利者である彼ら、またはその継承者たちが編纂した変革主導勢力寄りの史料が豊富に残されていることも研究偏重の原因のひとつである。

しかし、現在の基準や物差しを以て当時を捉えようとする回顧的思考を警戒しながらよく考えてみると、長い変革過程において当時の執権勢力である体制側勢力の存在感（体制崩壊の直前までも依然として強固であったはずである。体制側の主要政策決定者の動きは（今は彼らよりもっと有名で高い評価を受けている）変革勢力の活動家のそれよりも当時歴史展開の上で実際にはより大きな影響を与えた可能性が高い。したがって我々は政治的選好や史料不足の限界を乗り越え、体制側の奥深いところで繰り返された動きを綿密に検討してみる必要があると思う。

この様ないい方は幕末政治史にも当てはまる。周知のようにこの時期に対する研究は薩摩・長州や尊攘派活動家に集中されてきて、それから離れた場合も公武合体派の諸藩の動きや公議政体論などが主な研究対象であった。一部先学の業績を除いては幕府そのものを対象とする研究が

長い間放置されてきたといっても過言ではないだろう。これは単に幕末史だけの話ではなく、たとえば清末期の清朝による新政、あるいは十九世紀朝鮮の勢道政権に対する研究が長い間あまりなされてこなかったことと軌を一にすることといえる。ただ、幸いに近年ようやく幕府研究は進んでいる。最近の東大史料編纂所による『井伊家史料』の完刊はそれに拍車をかけることであろう。

ところで、幕府を扱う場合にも幕府の外から幕政への関与を試みようとする政治勢力の視点から捉えようとする傾向が強かった。つまり、所謂「開明的な」勢力が幕政に参加する機会を掴み改革を試みたが（本稿ではこの勢力をひとまず「迎入者」と称することにする）、幕府保守派、あるいは守旧派の反発で失敗してしまったという書き方である。私はこのような幕末政治史の叙述に接するたびに隔靴搔痒の感を禁じえなかった。幕末政治史の重要な片方、おそらく最も重要だとまでいえる幕府、とりわけ幕閣の動きがほとんど浮き彫りになっていないからである。薩長も尊攘派も、また公武合体派、公議政体派いずれもがいつも幕閣を意識し、彼らと競争しながら動いていたはずであるのに、である。

私は主に水戸藩など藩政史について研究してきたもので、幕府研究に対しては傍観者の一人にすぎない。したがって本稿は今まで幕末期幕府研究を横目で見てきた一素人の単なる印象や疑問点などを述べさせてい

ただくことにとどまる。

一 徳川斉昭と幕閣

嘉永六年（一八五三）ペリーが来航すると、水戸藩前藩主徳川斉昭は老中阿部正弘に求められ、幕政参与として幕政に参加することとなった。周知のように従来、幕政は中級規模の譜代大名によって担当されてきた。しかし、重大事の発生したとき、御三家が建白提出・諮問というかたちで幕政に関与することは前例がないことではなかった。ただこのように御三家の一人を特定して幕政に「参与」させることは異例ではないかと思われる。当時斉昭は五十三歳の老練な政治家で、水戸藩天保改革の強烈な印象、斉昭個人の強い尊王的態度、そして隠居後もつづいた中央政治への発言などによって、ペリー来航の時にはすでに「水戸老公」と呼ばれ、政治的カリスマを持つ人物になっていた。それはただ単に武士や知識人層に限ることなく、当時流行った俗謡などにもみられる如く少なくとも江戸庶民の中でも彼に対する期待感が膨れ上がっていた。斉昭個人の卓越した政治力、御三家のメンバーの中で唯一の中壮年という年齢とともにこのような衆望も阿部正弘が斉昭に助けを求めた理由の一つであろう。

その後の政治的展開は尊王攘夷と改革の名望を背景にした徳川斉昭の幕閣に対する挑戦と、幕閣の抵抗、そしてその両者を調整・仲裁する立場にあった阿部正弘という構図で進んだが、結局は嘉永七年（一八五四）三月日米和親条約の締結と斉昭の幕政参与辞職でひとまず終わる。

この時期に対する叙述もおおむね斉昭と阿部を中心にするものであった。しかし私が知りたいのは当代の政治的大物で、御三家の前当主であり、そのうえ首席老中の全的ではないものの、相当な支援を得ていた斉昭がぶつかった「壁」というものはいったい何だったのかという点であ

る。従来の政治史叙述は斉昭―阿部の連携に引かれすぎて、ある意味ではそれを割りと簡単に挫けた幕閣については粗忽にしてきたのではないかということである。斉昭をしてあれほど文句をいわしめ続け、結局挫折させた幕閣の様子を明かにしてこそバランスの取れた叙述が可能になるだろう。

まずペリー来航の際、幕府老中の顔触れを次の表にまとめた。（括弧内の数字は生没年）。当時の老中には阿部正弘、牧野忠雅、松平乗全、松平忠優（後の忠固、本稿では忠固に統一）、久世広周、内藤信親などがいた。この中で牧野忠雅、松平乗全両人は当時すでに五〇代半ばで、他に三〇代後半から四〇代初ごろの老中とは年齢的にかけ離れていた。だが注意すべきは牧野・松平両人と阿部正弘はほぼ同じ時期に老中に就いた点である。

幕政参与としての斉昭の相手はまさにこの人々であった。しかし、従来の研究は斉昭に焦点をあて、幕府内部に踏み入る場合にも阿部あたりで止まることが多く、⁽⁴⁾他の老中たちの動きは未だに明るみに出ていないと思う。斉昭は幕政に参与して以来、大船製造禁止の解除や海防の大号令を発することを執拗に要求した。しかし、この幕政参与というものが制度的にどこまで幕政に関与できたかが問題である。度々の登城は許されたものの、果たして御用部屋に入り、政策決定の場に臨席できたかどうか。そうでなければ、結局斉昭の幕政参与というのは阿部との文通、あるいは彼のもとに訪問してくる幕吏との議論を通じて、つまり間接的なやり方でしかできなかったことになるであろう。幸いに最近この問題に関して踏み入った研究が出ている。⁽⁵⁾この研究によると、斉昭の幕政関与のかたちは嘉永六年十二月の「手当」下賜を前後にして区分される。その前は諸役人が必要な時に斉昭を訪れるか、または彼が必要に応じて各部屋を訪れ、用談をした。すなわちこの時期の参与は幕閣らとの評議に

	1843	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	1862
阿部正弘 (1819-1857)																×				
牧野忠雅 (1799-1858)																	×			
松平乗全 (1795-1870)																				
松平忠優* (1812-1859)																			×	
久世広周 (1819-1864)																				
内藤信親 (1813-1874)																				

*のちに忠固に改名。本稿では忠固に統一。 × = 死去

参加できず、求められた際に意見を述べるようなものであった。この辺は数年後大老に就任する井伊直弼と好対照をなす。直弼は大老になって初めて登城したその日から御用部屋に入り、積極的に政治議論を主導し、周囲を驚かせた。「手当」下賜の後には幕閣との評議はできるようになったが、彼の主張は幕閣の「壁」を乗り越えることはできなかった。⁽⁷⁾

その「壁」はその後も斉昭の悩みの種であり続けた。安政二年（一八五五）阿部に幕閣の更迭を強く促した際、彼は「さて二三ハ（各々牧野忠雅、松平乗全を指す・朴）ハ碌々たる備員ノミ故御転ニ可相成候へ共、四（松平忠固・朴）ハ先々御用ニ立候よし、…愚考見込ハ二三ハ元より不足論候処、四ハ俗論苟且御承

知之通ニ有之、…左すれば四ハ廟堂俗論の根元ニ候間、万一二三のミ御動シ四が二番席ニ相成、貴兄の権を分ち候様相成候ハ必牛角両派の勢をなし（傍線は朴、以下同じ）、溜初俗論家ハ向ニ可相成、左候へハ天下之事不可奈何、臍をかみ候而も間ニ合申間敷候。」⁽⁸⁾といった。ここから斉昭の敵手が誰だったのか推測できる。忠固は上田藩五万三千石の大名で、譜代名門姫路藩主酒井忠実の次男である。文化九年（一八一二）生まれでペリー来航の時四一歳で嘉永元年（一八四八）に老中に就いたから在任六年目であった。阿部は文政二年（一八一九）生まれで当時三四歳、在任一年目であった。阿部と忠固との政治関係は詳らかではないが、忠固は年齢・在任期間・血筋のあらゆる面で阿部を十分に牽制する立場であったと考えられる。現に斉昭は彼の更迭に失敗すれば阿部の権力も脅かされるだろうと懸念していたのである。

また、斉昭の発言で注目されるのは、溜間詰大名らが忠固らを支持している点である。当時溜間詰には彦根藩の井伊直弼、高松藩の松平頼胤、嘉永五年（一八五二）松平容敬死後会津藩主になったばかりの松平容保、そして姫路藩の酒井忠実などがいた。弘化三年（一八四六）思わず彦根藩の世子になり、嘉永三年（一八五〇）藩主の座に就いた直弼は就任直前に起きた忍事件をうまく裁き、溜間の主導的人物に上がつっていた。この頃から彼と斉昭は競争関係であったという。⁽⁹⁾松平頼胤は水戸藩の支藩主ではあったが、忍事件で見られるように直弼の政治的協調者であって、本家の水戸藩、とりわけ斉昭とは激烈な権力闘争を繰り広げた人物である。会津藩の容保は就任直後の当時一七歳でまだ政治力を発揮できる年齢ではなかったが、その後見られるように親幕閣であった。酒井忠実も酒井忠実の孫分で、忠実の次男である忠固よりは世数関係で下である。そうでなくとも溜間詰は幕政を後ろから支える存在であったが、このような人的構成から窺えるように、この時期の溜間は

とりわけ斉昭―阿部に對し、幕閣、その中でも忠固を支援したと推測したら飛躍だろうか。

大号令發布の要求に抵抗する幕閣に向かい斉昭は嘉永六年十月十九日に辞意を漏らした。これに對する幕閣の反応は斉昭の言葉を借りれば次のようである。「阿部は御免の儀ハ先づ先づと申候牧野は平伏のみ松伊ハ赤面之様子ニ見え、何れにも何共不申候ひき¹⁰」と。意気揚々な斉昭の姿が目につかぶようである。果たしてや斉昭の強氣に負けたか、その後十一月一日大号令が發布された。しかし、「迎入者」の辞任脅迫と幕閣の慰留というパターンはその後にも繰り返されるものに過ぎない。「迎入者」はこの手段によってある程度の政治的 목적を達成するかに見えたが、それ切りで幕政を掌握するには至らなかった（それは後の文久改革において新「迎入者」である政事總裁職松平慶永と幕閣との関係にも該当する）。周知のようにその後、斉昭は幕閣と溜問詰の勢力に抵抗せず、日米和親条約の締結を手を拱いて傍觀するしかなかった。挙句に斉昭は嘉永七年四月晦日辞職に追い込まれた。御三家の大物の政治家斉昭と首席老中正弘の連携の力をもつてしても幕閣の「自立性」は毅然として保てたのである。

二 井伊直弼と幕閣

次は安政五年（一八五八）の場合をこのような視点から見てみよう。大老と幕閣との関係である。大老は一体政治的にどのようなポストだったのか。例えば大老は「幕閣」なのか。私がこれに答えられるはずがなく、ここでは問題提起にとどまる。直弼は譜代大名の筆頭だったせいとか、前述の徳川斉昭や文久改革時の松平慶永とは異なり、研究者にとってあまり「迎入者」扱いされてこなかった。それどころか、むしろ直弼の大老拔擢によって南紀派は強まったとか、幕府は強化されたという言

い方がなされてきた。そのような言い方があながち間違いいえないが、そこには大老と幕閣を暗黙の内に一体化する傾向があるように思われる。しかし、私は直弼関係の史料を読んでいく中でこのような見解には違和感を覚えるようになった。大老の座に躍り出た直弼とその家臣たちには、大老就任を前にして凱旋將軍のような雰囲気どころかむしろ躊躇や警戒の様子が感じられる。それが私には意外に思われた。例えば次のようである。「御職ニ無之候ハハ、其中ニも家格ヲ以押付候様之御工風も可有御座と相楽居候処へ、右御職ニ相成候而者弥十二五ツハ思召通りに者難相成筋も出来可申哉と、実に恐悦之中ニも是而已残念ニ奉存候¹¹」と。幕府の宮廷政治の仕組みに詳しくない私がこの史料の正確な意味を断定するには憚りを感じるが、大老に就任するといって直ちに幕閣を掌握することはできないという事情は十分読み取れる。しかも自分の言い分が半分は通せないだろうと懸念しているほどであった。

果たして直弼が直面したのは「閣中の内乱」であった。その有様を堀田正睦は松平慶永に次のように語る。「元来伊賀と掃部とハ不睦候ひしか大老となりし已後ハ伊賀より大に阿諛を尽くし又僕へも追従にて何事も上座々々と譲り聞え候ハ表面の姿計にて内実ハ大老へ取組み僕を压倒せんと種々の姦計を施し候等京師も外夷もさて置き閣中の内乱如斯実に御大事之至り大和ハ風波を考へ沖へも乗らず磯へも寄らず紀伊守中務ハ貴公程も事情を弁へず進退谷り恐懼の次第¹²」と。確かに忠固の「阿諛」は建前だけであった。直弼は慶永に「唯本多越中守ハ余と同意にて其他ハ一人の味方もなくて孤立の勢ひなれハ偏に貴兄初の援助を依頼するの外なし伊賀等ハ小身者の分際として此頃ハ權威に誇り傍若無人の有様¹³」¹³といっていた。幕閣の間では大老の登場を「員に具ふる而已¹⁴」¹⁴と一蹴する雰囲気もあつたという。

このような状況は当分続く。菊地久氏の觀察によると、大老直弼は六

月十九日の御用部屋にての枢機の評議で「多勢に無勢を強いられた」という。大多数の人々がハリスの申入れを是とするなか、「御用部屋での『御評議』に移るともはや井伊の譲歩を見守るような雰囲気」であつたといふことである。⁽¹⁵⁾この日藩邸に帰つてきた直弼の様子は「〔評議の内容を・朴〕御帰館直様被仰候間、右之御場合ニ至り候上ハ、御前御壺人如何程被仰候而も被成方ハ有御座間敷候得共：今日之場合能々御考被遊候へハ、陰謀之輩之術中ニ御落入被遊候哉与被思召、：」⁽¹⁶⁾と伝えられる。この茶番劇の勝利者はまずは直弼だつたことを我々はすでに知っている。しかし、ここで私はむしろあの大老をして無勢を感じさせ、「陰謀之輩之術中」に陥つたとの悔しさを言い滑らせた、その幕閣の「自立性」の存在感が気になるのである。

もちろん直弼はその後、条約締結と継嗣決定を経て正睦と忠固を解任し、間部詮房を老中に迎えることによつて「閣中の内乱」を鎮めたかに見える。私には今それ以降の話を進められる準備ができていない。ここからは母利美和氏の研究を頼り、一点付け加えることに止まりたい。条約締結と継嗣決定という大仕事を成し遂げた上、正睦や忠固なども追ひ払い、自分の意向に沿つて間部詮房まで老中に引き込むことに成功した直弼はその後権力独占を謳歌できたのか。否である。今度はその詮房との確執が生じた。大老に就いてからすでに一年も経た安政六年（一八五九）六月に直弼は詮房が自分の悪口を言いふらし、老中太田資始と同腹になり、何事も自分の知らない内に決まつてしまつと、またしも辞意を漏らした。⁽¹⁷⁾挙句に腹心長野義言は直弼に幕政参与田安慶頼や関白九条尚忠への支援要請を進言している。「大老就任後の直弼は、幕政においても老中評議・將軍伺いを前提とした意思決定を基本としており、条約調印の時にも見られるように、安政の大獄の最中においても、大老の地位による専決権がないため苦悩していたのである」⁽¹⁸⁾と母利氏は書いてい

るが、その通りである。結局大老井伊直弼ですら「迎入者」ではなかつたのだろうか。

三 御前会議なき幕政

藩政においても家老合意体制という権力構造があつた。⁽¹⁹⁾言つてみれば「藩閣」といふべきか。しかし、幕府の場合とは違つてそれは幕末期の政治過程においてずいぶん崩れつつあつた。それは手子中・奥祐筆・郡奉行など中下級役人の台頭によるものである。彼らいわゆる能吏たちは自分の学識や政治力から得られた「学的ネットワーク」⁽²⁰⁾でのリーダーシップ、また主に上書活動による世論掌握、政策決定会議での弁舌能力などによつて「藩閣」を揺さぶつた。しかし、それだけでは十分でない。権力を勝ち取るためには主君を政治の場に巻き込むことが必要であつた。つまり彼らの政治的登場は「主君親政」⁽²¹⁾の名分の下で、主君の政治化とセットになつてこそ可能になつたのである。その政治的表現が「御前会議」の頻繁な開催であらう。

水戸藩主に就任した斉昭は天保三年（一八三二）、「調役頭取又ハ若年寄代等と我等うわさいたし決候事にても夫ハ内々の義重職方に而決不申候義ハ度々せつき候計に而外に致方も無之我等も氣をもみ候計に退役も願度程に有之候」⁽²²⁾と嘆いた。そのような状況は天保七年（一八三六）にも「直書にて両金方へ遣候へ共：又直書にて申遣候義を政府二て指留候義さら二不聞事なり」といったように当分続いた。⁽²³⁾

しかし、周知のように水戸藩では「改革派（立原派・藤田派）」の政治的台頭によつて段々「藩閣」は揺さぶられていく。⁽²⁴⁾それは御前会議を含む主君親政と深く関係していると、私は考える。

彪政府にありし事前後十年許りの間、執政参政を初め目附（原文のまま）或は郡奉行勘定奉行奥右筆の類迄 御前に居並びて評議せ

したぐひは挙て数ふべからず。言路を開くといふこと古き書には見ゆるなれど我が藩の如く実に斯く迄も開けぬる事今の世には類あるまじくとほこりぬべし⁽²⁵⁾

東湖の自負に満ちた証言が事実だとしてもその自負はその後長らくは続けられなかった。なぜなら幕末期に入ると御前会議は水戸だけでなく一層広まったからである。たとえば長州藩である。幕末期長州においては御前会議が頻繁に開かれたが、そこに当役中とともに、下級実務役人の手子中⁽²⁶⁾（佐筆、用所役、遠近方、藏元兩人役、手元役、御用方中）が参加したという。この御前会議はすでに決定したことを御前で追認するという、形式的なものではなかった。会議では度々激しい論争が繰り広げられ、その結果によって政策の中身が左右された。身分や役職もいままでもなく重要であったが、その場では専門的な知識や弁舌能力、または会議運営の能力などがものをいった。幕末期に低い身分にもかかわらず政治の場で活躍を見せたものの多くは、ここで頭角を現した人たちであった。

こうしてみると、幕府においては諸藩と異なり、「幕閣」を凌ぐほどの中下級役人の政治的台頭はあまり見えないが、それは將軍親政が行われなかったことと深く関係していると思われる。井伊直弼が大老に就任するや否やしきりに將軍家定に拝謁を重ね、家定の「賢明さ」を強弁したのも幕政においても大老ですら幕閣体制を揺さぶるには主君の介入が必要であったことを物語る。しかし、ペリー来航以後激動の時期に將軍家定・家茂が有意義な政治力を発揮できなかったことはほぼ間違いない。政策決定に影響を与える「御前会議」はほとんど行われなかったといえる。幕閣と中下級役人との関係についてはまだ詳しい研究は出されていないようだが、幕府においては中級の譜代大名が就く老中の指導性は幕末期にも若年寄を圧倒するほど強固であったことも、この視点

から注意する必要があると思われる。

四 幕閣・幕政という謎

そもそも大身の家門をさて置いて小身だけに幕政を専断させた仕組みは異例的である。中国も朝鮮も歴とした家門の者たちが政治の前面に出るのが普通であった。というより、そもそも権力や政治から離れたところに歴とした家門などありえなかったといえる。ことが徳川家の「家政」の範囲か、あるいは平常の時ならともかく、国家的危機の時、小身の老中集団が確固たるリーダーシップをとるのはやはり無理な面があるだろう。権力的にはともかく威信的には彼らの上には、御三家、親藩、大身の譜代大名、雄藩の外様大名などがあり、彼らはせいぜい侍下の存在にすぎなかった。唯一の権源である將軍は肝心な時に政治的不能の状態であった。これが幕政参与、大老、政治総裁職と続く「迎入者」登場の背景であろう。

今まで見てきたように、これから明かにしなければならぬのは「迎入者」と幕閣との関係と、大物の「迎入者」に対しても維持できた幕閣権力の詳細な検討であろう。幕閣は別に「迎入者」に政権を譲ったことでもなければ、「迎入者」の主導権すらすんなりと認めたことでもないように私には見える。「迎入者」と幕閣との間には権力闘争・緊張と牽制の関係が繰り広げられ、幕末政治史を複雑極まりないものにした。それかといって、幕閣が一枚岩で団結していたかといえば、閣中は内乱⁽²⁷⁾の状態であった。問題なのはそれにもかかわらず、なぜ徳川斉昭、井伊直弼、松平慶永など幕末期第一級の政治家ですら幕閣を制圧するにあればど苦戦を強いられたのか、ということである。その「壁」というか、「力」というものの正体は未だに明らかになっていないのではないか。大胆な言い方を許されるなら、そこにこそ、他の東アジアの諸国

家と異なる近世日本権力の特徴があるのではないかと思われる。

注

(1) 菊地久「維新の変革と幕臣の系譜・改革派勢力を中心に―国家形成と忠誠の転移相克―」一七『北大法学論集』二九(三三四)―三三三(五)、一九七九―一九八三年をはじめ、氏の一連の先駆的な業績が代表的である。本稿も氏の研究に多く負っている。

(2) 三谷博『明治維新とナショナリズム 幕末の外交と政治変動』、山川出版社、一九九七年。同『ペリー来航』(新装版) 吉川弘文館、二〇〇三年。奈良勝司『明治維新と世界認識体系―幕末の徳川政権信義と征夷のあいだ』、有志舎、二〇一〇年。久住真也『長州戦争と徳川將軍―幕末期畿内の政治空間』、岩田書院、二〇〇五年。同『幕末の將軍』、講談社、二〇〇九年。母利美和『井伊直弼』、吉川弘文館、二〇〇六年。佐藤隆一『幕末期の老中と情報―水野忠精による風聞探索活動を中心に』、思文閣出版、二〇一四年。麓慎一『開国と条約締結』、吉川弘文館、二〇一四年。後藤敦史『開国期徳川幕府の政治と外交』、有志舎、二〇一五年など。

(3) ①朴薫「十九世紀前半日本における「議論政治」の形成とその意味―東アジア政治史の視点から―」、明治維新史学会編『講座明治維新Ⅰ―世界史のなかの明治維新』、有志舎、二〇一〇年。②同『幕末政治変革と「儒教的政治文化」』、『明治維新史研究』八、二〇一二年。③同「東アジア政治史における幕末維新政治史と士大夫的政治文化」の挑戦―サムライの「士化」、清水光明編『近世化』論と日本―「東アジア」の捉え方をめぐって、勉誠出版、二〇一五年。④同「武士の政治化と「学党」―十九世紀前半の日本における「士大夫的政治文化」の台頭」、塩出浩之編『公論と交際の東アジア近代』、東京大出版会、二〇一六年。

(4) 菊地久「阿部正弘政権、その組成と手法」、北海学園大学法学部編『変容する世界と法律・政治・文化―北海学園大学法学部40周年記念論文集』下巻、二〇〇七年。

(5) 篠崎佑太「嘉永期における徳川斉昭「参与」の実態と影響」『明治維新史研究』一五、二〇一八年。

(6) 佐々木克『史料公用方秘録』、彦根城博物館、二〇〇七年、一四頁。

(7) 篠崎佑太、前掲論文、九―一一頁。

(8) 「事修叢書」維新史料編纂事務局『維新史』二巻、明治書院、一九四〇年、一一〇頁。

(9) 金玄耿「井伊直弼の政界登場と政治的立場の形成溜詰と忍事件を中心に」(ハンゲル、未刊)

(10) 「斉昭より戸田銀次郎・藤田東湖への書翰」『維新史』二巻、七四頁。

(11) 「井伊家史料」六、二〇六頁。

(12) 中根雪江「昨夢紀事」四巻、日本史籍協会、一九二二年、五二頁。

(13) 「昨夢紀事」四巻、一九三頁。

(14) 「昨夢紀事」三巻、三五九頁。

(15) 菊地久「井伊直弼試論―幕末政争の一断面(中の二)」『北海学園大学法学研究』五三(四)、二〇一八年、三六九頁。

(16) 「史料公用方秘録」、一八頁。

(17) 母利美和 前掲注(2)、二一六頁。

(18) 母利美和 前掲注(2)、二一八頁。

(19) 笠谷和比古『近世武家社会の政治構造』、吉川弘文館、一九九三年。

(20) 学術的ネットワークの概念については、前掲注(3)③・④。

(21) 主君親政の拡散については前掲注(3)②。

(22) 「水戸藩史料」別記上、吉川弘文館、一九七〇年、四七二頁。

(23) 「水戸藩史料」別記上、五二四頁。

(24) 前掲注(3)①。

(25) 「常陸帯」菊池謙二郎編『新定東湖全集』、博文館、一九四〇年、七五頁。

(26) 井上勝生「幕末における御前会議と「有司」」『史料』六六―五、一九八三年(同『幕末維新政治史の研究』、塙書房、一九九四年)。上田純子「安政五年秋藩における「会議」と政治機構―幕末維新期政治史再考のための一試論―」『史学雑誌』一〇七―六、一九九八年。